

あかるさかおるの スケッチブック

— 男女共同参画推進コラム —

山形県男女共同参画推進員を務める「あかるさかおる」※さんによる連載コラムです。

※アーティストネーム

はじめまして、あかるさかおるです！イラストやデザインを手掛けたり、英語でのガイドや通訳をしたり、はたまた女性のコミュニティを作る活動をしていたりする、何屋さんなのかわからない「複業」アーティストです。



早いもので、ここ三川町に嫁いで10年以上が経ち、今では2児の母。日々お世話になっている皆さん、ありがとうございます！移住したての頃は、英語の先生として町の幼稚園、小・中学校を巡って

いたので、もしかしたら覚えてくれる子もいるかもしれません。そうだ！押切小の皆さん、押切小キャラクター「オシロー」を描いた人ですよ (^_^)



さて、そんな私は最近「ナリワイ」の人と呼ばれます。「鶴岡ナリワイプロジェクト」の起業講座修了生だからです。ナリワイとは、自分の「好き・得意」×「地域に良いこと」で生み出す自分だけの小さなビジネスのこと。ナリワイづくりを皮切りに、地域の中で自分から動き出す人を増やしていこう！という活動とも言えます。今この働き方が全国で

同時多発的に広がっていて、その先進地が実はここ庄内なのです。

私の大きな活動の拠点が「ナリワイ ALLIANCE」です。アライアンスは同盟という意味。ナリワイという働き方・生き方を選んだ女性たちと一緒にイベントの企画・運営や、勉強会を開いています。バックグラウンドも性格も、とってもユニークで尊敬できる仲間にも囲まれていることが私の心のエンジン。フラットな関係性の中で助け合い、自分らしく生きるためのよりどころとしてそこにあるようなコミュニティになればと願っています。

このコラムでは、さまざまな活動のご報告や、身の回りのちょっと気になる出来事を、あかるさかおるの視点から楽しく描いていければと思います。どうぞお付き合いください。



ナリワイ ALLIANCEは、
「やまがた女性のつながりサポート事業」の
委託を受け、3つの活動をしています！

- ① みんなでごはんの日（子ども食堂）
- ② idobataらんちたいむ
（昼食を食べながらオンラインでおしゃべり会）
- ③ ジェンダー初めの一步
（ジェンダーについて共に学ぶワークショップ）



【このコラムを書いている人】



すがわら さやか
菅原 明香（あかるさかおる）

山形県男女共同参画推進員
アライアンス
ナリワイ ALLIANCE 代表

通訳ガイドやアート活動なども行う
複業アーティスト。2児の母。



あかるさかおるの スケッチブック

— 男女共同参画推進コラム —

山形県男女共同参画推進員を務める「あかるさかおる」※
さんによる連載コラムです。

※アーティストネーム

“男らしさ・女らしさって、なんだろう？”

ある時、シニア世代の男性と音楽のお話をしていたら、こんなことをおっしゃいました。「我々が子どもの頃は、男子がピアノの前に座るなんてことは許されなかった」。

最近、ジェンダーフリーやジェンダーレスという言葉をよく耳にするようになりました。でもそもそも「ジェンダー」とはなんでしょうか。なんとなく性別のこと？と思っている方が大半かもしれません。ジェンダーとは生物学的な性とは違って、社会的・文化的につくられた性のことを指します。つまり、個人の意思とは無関係に男性はこう、女性はこう、と社会の中で与えられる役割や固定観念のことで、男らしさ・女らしさという意識もそこからやってきます。

例えば、「男だろ!」「男なら!」という声掛けの背景には、男は強くて泣き言は言わないものだ、もっ

とえば、女々しいのは女(女が2つでめめしいという漢字だし)という意識が見え隠れします。また「男は度胸、女は愛嬌」とよく言いますが、愛嬌たっぷりの男性だってまた素敵だし、何事にも動じない女性だってまた魅力的なはずです。

一昔前までピアノは女子の嗜みで、男子が弾くのは恥ずかしいことでした。今は意識が変わってきたとは言え、まだまだ私たちは、男だから、女だから、母だから…などなど、「こうあるべき」に縛られているように思います。もしかしたらそれが、私やあなたの生きづらさの根底にあるのかも!? そう気づくと、少し楽になりませんか。

【このコラムを書いている人 】

すがわら さやか
菅原 明香(あかるさかおる)

アリアランス
ナリワイ ALLIANCE 代表

通訳ガイドやアート活動、コミュニティづくりなどを行う複業アーティスト。三川町在住、2児の母。



あかるさかおるの スケッチブック

— 男女共同参画推進コラム —

山形県男女共同参画推進員を務める「あかるさかおる」※さんによる連載コラムです。

※アーティストネーム

“君たち2人の違いはなあに？”

男女共同参画と聞くと「男vs女」の対立の構図を思い描くかもしれません。でも本当は、対立ではなく共生、「誰もがありのままで受け入れられる」社会にしていこうということなのだと思います。

私の好きな動画を一つ紹介します。イギリスの放送局BBCの番組で、5歳くらいの友達同士がペアで何組か出てきます。ここで特筆すべきは、大人の目から見ると明らかな違いがある2人だと言うこと。車椅子の子と健常者の子、アフロヘアの黒人と赤毛の白人、アジア人の女の子と白人の男の子、と言う具合です。そしてこの質問。「君たち2人の違いはなあに？」

子どもたちの答えには心が温まります。「僕はレタスが好きだけど彼女は嫌い。」「私は体操、彼女は水泳が得意。」「彼は僕より鬼ごっこが上手い。」など

など。人間は2歳くらいから自分と相手を属性で分けることを始めるそうなので、この子どもたちにもいわゆる大人たちが見つける違いは見えているのです。ただ2人にとって、体の違い、人種、性別など、大きな問題ではないだけ(少なくとも、レタスが好きか嫌いよりかは！)。

私たち大人が偏見や先入観を捨てて子どものように対等に相手を見ることが出来たなら、ありのままを受け入れ、互いに尊重する社会が実現するのかもしれないね。



【このコラムを書いている人 】

すがわら さやか
菅原 明香（あかるさかおる）

山形県男女共同参画推進員
アライアンス
ナリワイ ALLIANCE 代表

通訳ガイドやアート活動なども行う
複業アーティスト。2児の母。



あかるさかおるの スケッチブック

— 男女共同参画推進コラム — No.4

山形県男女共同参画推進員を務める「あかるさかおる」※
さんによる連載コラムです。 ※アーティストネーム

“フェムテックって何？生理の今を学ぼう！”

小学5年生のころ、なぜか女子だけが保健室に集められたと思ったら、生理用ナプキンの使い方を教わりました。その時、これは男子に知られてはいけないものなのだと子供心に悟った記憶があります。男子も何か察したのか、しつこく尋ねる子はいませんでした。

月経・更年期など、女性の体にまつわるさまざまな悩みは、恥ずかしいこと、人知れず我慢するものとされ、公に語られることはなかなかありません。でもどうでしょう？職場での生理休暇や不妊治療休暇などは避けては通れない話題になりつつあります。女性も男性も一緒に学ぶことが実は大事なのです。「みんな違ってみんないい」互いに尊重される社会は、違いを認めることから始まるのではないのでしょうか。

フェムテックという言葉をご存じですか？ Female（女性）と Technology（テクノロジー）をかけ合わせた

造語で、女性特有の健康課題をテクノロジーで解決する商品やサービスの総称です。月経周期を予測するアプリや生理期間中を快適に過ごすための商品、女性が主体的に選べる避妊法など、近年続々と登場しています。

生理の話をもっとオープンに！そんな思いから、10月29日(日)、アトク先生の館で「みんなの保健室」というイベント(みかわ秋まつり特別行事)を、仲間と一緒に開催します。フェムテック商品の展示や、外国人ゲストを交えて世界と日本の今を知るワークショップもあります。男性也大歓迎！ぜひ会場でお会いしましょう！

【このコラムを書いている人 】

すがわら さやか
菅原 明香（あかるさかおる）

ナリワイ ALLIANCE 代表

通訳ガイドやアート活動、コミュニティづくりなども行う複業アーティスト。三川町在住、2児の母。



あかるさかおるの スケッチブック

— 男女共同参画推進コラム — No.5

山形県男女共同参画推進員を務める「あかるさかおる」※
さんによる連載コラムです。

※アーティストネーム

“私もあなたも大切に「みんなの保健室」”

10/29(日)、みかわ秋まつり特別行事としてアトク先生の館で開催した「みんなの保健室」。**【私とあなたの心と体を大切にする一日】**というテーマで、体を整える「じょさね体操」、心をうるがす「よねさんの紙芝居」をはじめ、フェムテック関連展示や防災コーナーなどの体験を通して、日々を心地良く過ごすヒントを見つけるイベントでした。ハロウィン仕様に飾られた歴史ある建物と美しい日本庭園のコンビネーションは独特の温かい雰囲気、町外から初めて訪れた方々も魅了されていました。

さて、イベントの目玉は、外国人ゲストと一緒に生理や性のあり方について考えるワークショップ。庄内で結婚・出産・子育てを経験したフランス人女性とニュージーランド人男性をゲストに迎え、自国にあって日本にないものや日本で驚いたことなどを共有してもらいました。例えば、ニュージーランドでは女性の首相が今まで3人いて、任

期中に産休を取った方もいること。日本では馴染みの薄いピルによる生理痛のコントロールは、フランスではかなり前から一般的で安価であること。視点が違うお二人の話はまさに目から鱗で、様々な気づきがありました。参加者に男性がいらしたことも嬉しかったです。

生憎のお天気でしたがたくさんの皆さまにご来場いただき、一緒に笑って、素晴らしい時間になりました。ありがとうございました！



【このコラムを書いている人】

すがわら さやか
菅原 明香（あかるさかおる）

アライアンス
ナリワイALLIANCE 代表

通訳ガイドやアート活動、コミュニティづくりなども行う複業アーティスト。三川町在住、2児の母。



あかるさかおるの スケッチブック

— 男女共同参画推進コラム — No.6

山形県男女共同参画推進員を務める「あかるさかおる」※
さんによる連載コラムです。

※アーティストネーム

“自分で選ぶ”

今年、ある大手ランドセルメーカーのドキュメンタリー動画が話題になりました。我が子のランドセル選びを、保護者は別室で見守ります。「ピンクが好きだからきっとピンクを選ぶ。」「汚れが目立たない色だと嬉しい。」などと話しながらモニターを覗くと、子どもたちは皆、以心伝心の如くパパ・ママの期待通りのランドセルを選んでいきます。納得の表情の親御さんたちですが、そこで驚きの事実が判明します。「保護者の方が選んでほしいと思うランドセルを選んでもらいました。次は本当に自分が使いたいランドセルを選んでもらいます。」

すると、黒のランドセルを選んだ男の子は白に、ピンクだった女の子は青に変更。そして、黒に赤の縁取りのものを選んでいた男の子は、ピンクで星が煌めくものを選び直したのです。自分の選んだランドセルを背負って親御さんにご対面。自分のチョイスを認めてもらった子どもたちはとても嬉しそうで、また誇らしげでした。

誰かが喜ぶ答えじゃなくて、自分の心で選ぶこと。大切だけど難しい、幸せに生きるのに必要なスキル。子どもだからと誘導せずに、小さな時からたくさん練習して身に付けてほしいと願います。また私たち大人は、ピンクを選んだ男の子に「似合うよ」と言ってあげられるでしょうか。もし躊躇するなら、それはなぜでしょう。次世代が“誰もがありのままで生きやすい社会”に近づくかどうかは、今の私たちの意識にかかっています。

最後に…実は「通学はランドセルで」という規則すらないのをご存じですか。どんな鞆で通学するかも含めて「自分で選ぶ」を応援してあげられたら、もっと素敵かもしれませんね。



【このコラムを書いている人】

すがわら さやか
菅原 明香（あかるさかおる）

アラリアンス
ナリワイ ALLIANCE 代表

通訳ガイドやアート活動、コミュニティづくりなどを行う複業アーティスト。三川町在住、2児の母。



あかるさかおるの スケッチブック

— 男女共同参画推進コラム — No.7

山形県男女共同参画推進員を務める「あかるさかおる」※
さんによる連載コラムです。
※アーティストネーム

“ちゃんとしてオバケ”に捕まったら”

子育てをしていると「ちゃんとしなさい!」と毎日何度も口にしていて、ヒヤッとします。ちゃんと食べて!ちゃんと歯を磨いて!ちゃんと宿題をして!などなど。全国で子どもたちは、家でも学校でも“ちゃんとしてオバケ”に追いかけて回されていることでしょう。

大人になっても相変わらず、男なんだから、母親なんだから、もういい歳なんだから…。ありとあらゆるところに、ちゃんとしてオバケが潜んでいます。それは家族や同僚かもしれないし、近所の方かもしれないし、レストランでたまたま隣に座った人かもしれないし、はたまた自分自身の中にも…。油断した途端に出てきて、「ちゃんとしなさい!」と勝手に叱咤激励してくるのです。

そもそも「ちゃんと」って何でしょう? 定義が曖昧です。辞書にはこうありました。

1 少しも乱れがなく、よく整っているさま。

2 確実に間違いのないさま。

つまり、「乱れているから整えよう」「間違えているから正しい道に戻そう」と使う言葉です。でも誰から見て乱れていて、誰から見て正しいのでしょうか。世間の常識? 誰かの価値観? それは本当に、私にとっても正しいの?

何が正解かも、人それぞれ。それに「正しさ=幸せ」とも限りません。ちゃんとしてオバケに捕まったら、深呼吸して、こう呟いてみましょう。「これも、ありかも。」ほら、オバケなんて消えちゃいましたよ。

【このコラムを書いている人 】

すがわら さやか
菅原 明香 (あかるさかおる)



アライアンス
ナリワイ ALLIANCE 代表

通訳ガイドやアート活動、コミュニティづくりなどを行う複業アーティスト。三川町在住、2児の母。



あかるさかおるの スケッチブック

No.8

バックナンバーは、町ホームページで
まとめて読むことができます▶



“がんばれ日本のメディア”

「マイケルが夕飯を作る間、ケイトがぼくを散歩に連れていくんだ。」一匹の犬が主人公の英語の絵本の一節です。男性のマイケルが炊事をするのがサラッと、当たり前のように表現されています。お！と思って出版年を調べると、1998年。四半世紀も前の作品でした。

日本にも素晴らしい絵本はたくさんありますが、全般的に女性はエプロン姿で買い物や料理、男性は職業が分かる服装で仕事をがんばる存在として描かれることが多いのが気がかりでした。障がいのある人物や性的マイノリティーのキャラクターが出てくことも稀です。この傾向は、子ども向けアニメやテレビ番組でもほぼ変わりません。

思えばアメリカにいた頃、少なくともメディアの中には多様性が溢れていました。さまざまな人種を起用する配慮が制作側に求められ

ていましたし、障がい者やLGBTQの人たちもごく自然に登場していました。

日本のジェンダーギャップ指数は、146カ国中125位と、世界最低レベルです。自分を取り巻く社会がどんなものを学ぶ幼少期に、どんな絵本やアニメ、テレビ番組に触れて育つのか、その違いがこの順位に表れているようにも思えてなりません。

子どもたちはまっさらで生まれて、親から、メディアから、教育の場で、世の中の当たり前を教えられていく。だからまずは、育てる私たちの当たり前をアップデートして、次世代に繋いでいきたいと思います。

【このコラムを書いている人 】



すがわら さやか
菅原 明香（あかるさかおる）

ナリワイALLIANCE 代表

通訳ガイドやアート活動、コミュニティづくりなどを行う複業アーティスト。三川町在住、2児の母。



あかるさかおるの スケッチブック

No.9

バックナンバーは、町ホームページで
まとめて読むことができます▶



「はて？」で拓く未来^{ひら}

この春のNHK連続テレビ小説「虎に翼」が面白い！すっかり心奪われ、毎朝ワクワクです。

舞台は昭和初期、日本初の女性弁護士・三淵嘉子^{みぶのよしこ}さんがモデルの物語。女性の権利が今よりずっと制限され、参政権^{さんせいけん}もなかった時代に、法の道を志す主人公・寅子^{とみこ}（伊藤沙莉）と仲間たちの奮闘劇です。

女性は家の外ではスッとして、意見しないことが美德とされる中、寅子は腑^{はら}に落ちないことに会おうと必ず、「はて？」と首をかしげ、疑問をはっきりと口にします。心の引っ掛かりやモヤモヤを黙って飲み込んでしまわずに、「はて？」と切り返す寅子の正当でストレートな言葉は、不当な扱いを受けても言葉に出せなかった無数の人たちの心の叫びを代弁してくれているようで、はっとします。

「合わないお相手と無理にご一緒しなくても…」同級生の言葉に寅子は応えます。「私たち

は地獄の道に行く同志よ。考えが違おうが共に学び、共に闘うの。」そう、決して皆が同じである必要はないんですよね。違うことを認めた上で、つながることが出来るかどうか、変化への鍵なのかもしれません。

未来は勝手に進まない。

進めてきた人たちがいる。

（国際女性デー2021、新聞広告）

さまざまな分野で、「はて？」と不条理を飲み込まずに声を上げ、未来を進めてきた先人たちの情熱と苦労に感謝し、私もまた、わずかでも未来を進める一人になりたいと胸を熱くする今日です。

【このコラムを書いている人 】

すがわら さやか
菅原 明香（あかるさかおる）

アライアンス
ナリワイ ALLIANCE 代表

通訳ガイドやアート活動、コミュニティづくりなどを行う複業アーティスト。三川町在住、2児の母。



あかるさかおるの スケッチブック No.10

バックナンバーは、町ホームページで
まとめて読むことができます▶



“千と千尋とホントの私”

最近母になった友人が、面白いことを言うのです。妊娠してからというものの「千と千尋の神隠し」の千になったみたいだと。母子手帳を交付してもらいに行っても、検診でも「ママは体調どうですか?」「ママのお仕事は?」。本名の書いてある書類が目の前にあるのに、「ママと呼ばれる!」と。

ジブリ映画「千と千尋の神隠し」では、異世界に迷い込んだ千尋が、魔女の湯婆婆^{ゆばーば}に「千尋というのかい? 贅沢^{ぜいたく}な名だね。今からお前の名前は千だ。」と名前を取り上げられてしまいます。本当の名を忘れてしまえば、自分が何者かもわからなくなり、元の世界に戻ることも叶いません。湯婆婆は名前を奪うことで相手を支配するのです。

名前は、自分のアイデンティティの核となるかけがえのないもの。親の願い、今まで培ってきた能力、育んできた夢、大切な思い出…自分を作る

全てが、そこには宿っています。

一方で、ほとんどの女性は結婚すると名字が変わり、そして子供ができると、家族だけでなく世間からもママと呼ばれるようになります。それは幸せであると同時に、自分らしさを手放すような、私が私でなくなっていく感覚…。

もちろん妊娠・出産は尊いし、我が子は本当に可愛い。それでも多くの女性が不安や孤独を感じる一因は、この感覚にあるのかもしれません。誰かの妻でもママでもない、内なる本当のあなたを認めてくれる人が、身近にいてくれますように。がんばる「千尋たち」に、エールを。

【このコラムを書いている人 】



すがわら さやか
菅 原 明 香 (あかるさかおる)

アライアンス
ナリワイ ALLIANCE 代表

通訳ガイドやアート活動、コミュニティづくりなどを行う複業アーティスト。三川町在住、2児の母。

